風吹きて、波の岸にあたりてかへるを見て、自らも速に、都にかへらんとおもふなり。よつて、この歌をよみしなり。なみだの玉とは、涙のことをいふ。緒は玉をぬきてこそ、かひはあれ、今いかに緒をよりたりとも、更に涙の玉を貫きとむることの出來ねば、かひなきことなり。風の爲に、波あらく、急に都にかへられぬくるしみをといへるなり。緒をよるとわざ〳〵いへるは、船中にて、女ともの、實にそれをより居たりけん。

四日、舵取、けふ風雲のけしき、甚、あしといひて、船いださずなりぬ。さかれども、ひねもすに、波風たゝず。この舵取は、日もえはからぬ、かたゐなりけり。

えはからぬ云々、舵取は、天氣を、能く見るものなるに、これは、風波のありといひて、船出さゝりしに、今に、風も波もなきをおもへば、これは、日もはかり見ることを得ざる乞兒（カタヰ）なりと詈りていへるなり。これ一日もムダに、船中にあらんをくるしみての言なり。おもしろき詞といふべし。

この泊りの濱には、くさ〳〵のうるはしき貝石など、多かり。かゝれば、たゞむかしの人をのみ、戀ひつゝ、船なる人のよめる。

よするなみうちもよせなむわかこふる
　人わすれかひおりてひろはん

といへれば、ある人のたへずして、船の心やりによめる。

わすれ貝ひろひしもせじ白玉を
　こふるをたにもかたみとおもはん

となんいへる。

くさ〳〵の云々、貝石などを見て、亡兒の事をおもひいだしたる情、さもあるべし。わすれかひ、わするゝといふ名より、人わすれかひとつゝけたるなり。ある人、紀氏もかなしみにたへずしてなり。白ら玉、子の事なり。せめて、亡兒を戀ふる心をなりとも、かたみとおもはんほどに、我はわすれ貝は、拾はじとなり。

女兒のためには、親をさなくなりぬべし。玉ならずもありけんをと、人いはんや。されども、死にし子、かほよかりきといふやう

もあり。

女兒の云々、慈父母の心さもあるべし。金言なり。玉ならずも云々、彼の見は玉のやうにもあらじと、人はいはん。されども昔より死にし兒の顏よかりきといふこともあり。されば、おのれが子を玉にたとへいふも、さるべきことならんとなり。

猶同しところに、日を經ることなげきて、ある女のよめるうた

手をひて〻寒さも知らぬいづみにぞ
くむとはなしに日ころへにける

手をひて〻、手を漬してなり。泉は寒きものなれども、こゝは、和泉國なれば、寒さも知らぬといへるにて、一二の句は序なり。くむとは、泉はくむものなれば、かくいふなり。

五日、けふからくして、いづみのなだより、小津のとまりをおふ。

松原目もはるゝ〻なり、かれてし、くるしければ、よめる歌。

行けどなほゆきやられぬは妹かうむ

目もはるゝ〻、見わたすかぎり、松原なるさまなり。妹かうむ、緒の枕詞より、小津の小を緒にかけたるなり。小津の浦の松原の長くつゝけるさまなり。

かくいひつゝ、くるほどに、船とくこげ、日のよきにと、催せば、舵取、船子ともがいはく、みふねより、おほせたぶなり、あさきたの、いでこぬさきにつなでは、やひけ、といふ。このことばの、歌のやうなるは、舵取のおのつからの詞なり。舵取は、うつたへに、われ、歌のやうなることといふとにもあらず、きく人の、あやしく、歌めきても、いへるかなとて、かきて出せりければ、げに、三十文字あまりなりけり。

とく漕け、疾く漕げよ、天氣もよければと催すなり。みふねより云々、舵取が船子どもに命令して、いへる詞なり。御船より仰せたまふなり。汝等、朝の北風吹き出ぬさきに、速に漕き引けよといふなり。はや、は、速くなり。この詞の云々、この舵取のいひしことばの、歌のやうにも聞ゆるは、自然の詞なり。舵取

は一向に、我歌よまんと構へて、いひしにはあらざるへけれど、聞きつけたる人の恠しくも、歌めきたりと、いひて、書き出せるを見れば、いかにも、三十一文字の詞をなせりとなり。これ古今集の序に、貫之の、歌はおもふまゝをおのつからにいひ出すを、旨とすといふ、持論の一端を見るに足らん。

けふ波なたちそと、人々ひねもすに祈るまゝるしありて、風なみたゝず。今し、かもめ、むれゐて、あそぶ所あり。京の近つくよろこびのあまりに、あるわらはのよめるうた。

いのりくり風間とおもふをあやなくに
　かもめさへたゞ波と見ゆらん

といひて、ゆくあいだに、石津といふところの松原、おもしろくて、濱邊遠し。又住吉のわたりを、漕き行く。ある人のよめる。

いま見てぞ身をはしりぬる住のえの
　松よりさきに我は經にけり

今し、しは例の強助辭。かもめさへ云々、祈りくるまゝるしありて、やう〳〵風のふかずなりしと、おもふに、鷗までも、白く波のやうに、見ゆることかなと、波を恨む心を、これにうつしていへるおもしろし。今見てぞ云々、住吉の松は、年經にけるものとおもひ居りしに、今見て初て、我身のそれよりまさりて、老ひたるを知りけりとなり。これ、風波にくるしめられて、齡もちゞむばかりなるを歎きたるあまりの歌なり。紀氏の事なるべし。

こゝにむかしつ人の母、一日片時も、わすれねばよめる。

住のえに船さしよせよわすれ草
　おるしありやと摘てゆくべく

となん、うつたへに、わすれなんとにはあらで、戀しきこゝちも、おはしやすめて、またもとふるちからにせんとなるべし。

むかしつ人、昔の人といふにおなじ。女兒の事なり。忘草云々、ノウ能取よ、此岸に船をさしよせよ。その岸に生ずといふ忘草を摘て、昔をわするゝやうにせんほどにとなり。うつたへに云々、紀氏の評なり。忘草をつまんといふは、一向にわすれはてんとにはあらざるべし。あまり恠のびつゝけてはくる

しさたへがたきまゝに、暫し休めて、再びこふる時の力にせんとなるべし。即ち、一時おさへて、更に大にこひ慕はん用意なるべしといへる、切なる辭といふべし。

かくいひて、ながめつゝくるあいだに、ゆくりなく、風ふきて、こけども〳〵、まりへ、まぞきにまぞきて、ほと〳〵しく、うちはめつべし。檝取のいはく、この住吉の明神は、例の神ぞかし。ほしきものぞ、おはすらん、とは今めくものか。さてぬさたてまつれといふに、またがひて、ぬさたてまつる。かくたてまつれども、もはら、風やまで、いや吹きに、いやたちに、風波のあやふければ、檝取またいはく、ぬさには、御心のゆかねば、御船もゆかぬなり。なほうれしとおもひたまふべきものゝ、たいまつりたまへといふ。またいふに、またがひて、いかゞはせんとて、眼もこそ二つあれ、たゞひとつあるかゞみを、たてまつるとて、海にうちはめつれば、くちをし。されは、打つけに、海は、鏡のごとなりぬれば、ある人の

よめる歌。

千早振神のこゝろをあるゝ海に
かゝみをいれてかつ見つるかな

いたく住の江のわすれ草、岸の姫松などいふ神にはあらずかし。目もうつら〳〵鏡に神の心をこそは見つれ。舵取のこゝろは、神の御心なりけり。

ゆくりなく、不意になり。まぞきに云々、後へ退きに退くとなり。この文古躰なり。ほと〳〵しく云々、殆と船を覆すやうなりとなり。例の神云々、いつもの通りの荒ぶる神なり、何か欲しとおもひたまふものあらんとなり。いまめくものか、當世風めくものかとなり。物をほしがる今の人情に似ておはすことよといふか如し。いやふきに云々、深く風波の立つことといふ。古躰の文なり。御心のゆかねば云々、幣には、神の心のゆかねば、猶外に神の嬉しくほしとおもひたまふものを奉れといふなり。心のゆかぬとは、心の進まぬやうのことなり。まなこも云々、大切なる眼も二つあれとも、

唯一つより外になき鏡を、奉るといふなり。いと惜しくおもふさまをかけるなり。うちつけに云々、直にとか、さしあたりて、とかいふが如し。千早振云々、海に鏡を入れたれば、波靜になりければ、鏡に神の心を見たりとなり。心を一本のともなり。かつとは、神の心と鏡と二つを、海の上に見し故にいふ詞なり。いたく云々、かやうにものほしきために、人を苦しめ給ふ神は、ヤカマシク歌などにいふ、住の江の神にはあらざるべしとなり。目もうつらうつら目もつら〳〵なり。キラ〳〵と、鏡の光るさまをいへるにかけても心得べし。舵取の心は云々、舵取の言に隨ひて、この神の心も治りければ、かくはいへるなり。

六日、みをつくしのもとよりいで、難波の津をきて、河尻に入る。皆人々、女、をさなきもの、額に手をあて、よろこぶこと二つなし。かの舟酔の、淡路の島の、おほいこ、都ちかくなりぬといふをよろこびて、船底（ソコ）より、かしらを、もたげさせて、かくぞいへる。

いつしかといぶせかりつる難波がた

いとおもひの外なる人の、いへれは、人々あやしかる。これがなかに、心ろなやむ舟君、いたくめでゝ、舟酔したまひし、みかほには似ずとあるかなといひける。

みをつくし、水の深さ淺さを知る爲に、立ておきたる標木なり。水脉の鏡の意なりといふ。淡路の島の云々、前に見えし、あはぢのたうめのことなり。もたけさせて、人に頭を擡げさせてなり。これ酔人なれはなり。いぶせかりつる、心もとなくおもひ居りしなり。あしこきそけて、蘆の生したるところをかき避けて、御舟が入りしとなり。何の障もなく入りしことをよろこびていへるなり。おもひの外なる人云々、これまで舟酔して、物もえいはざりし人の、歌よみければなり。みかほ、御顔なり。歌のよく出來たるをほめて、舟酔の御かほには似ずといへるなり。舟君は紀氏なり。

あし漕きそけてみふぬきにけり

七日、けふは、川尻に、船いりたちて、漕きのぼるに、川の水、乾（ヒ）て、なやみわづらふ。舟の、のぼること、いとかたし。かゝる間に、舟君の

病者、もとよりこちゝしき人にて、かうやうの事、更に知らざりけり。かゝれども、淡路のたうめの、歌にめでゝ、みやこほこりにもやあらん、辛くして、あやしき歌、ひねり出せり。その歌、

來と來ては川の堀江の水をあさみ
　舟も我身もなつむけふかな

これは、病をすれば、よめるなるべし。ひと歌に、ことのあかねば、今一つ。

とくとおもふ舟なやますは我ために
　水の心のあさきなりけり

この歌は、都近くなりぬる、よろこびに、たべずして、いへるなるべし。淡路の御歌に劣れり、ねたき、いはざらましものをと、悔しかる中に入りて寢にけり。

なやみわづらふ、惱み煩ふにて、舟の進みかぬることなり。病者、舟に醉へる爲の病者なり。こちゝしき、武骨なることなり。みやこほこりに云々、淡路の御の歌に感して、都に近つきたる、誇りこゝちより、ヤツトの事で、恠しき、歌捻り出したりとなり。來と來ては、こゝまで來るとして來たところがといふが如し。あさみ、水が淺さになり。なづむ、惱むことなり。舟も進まず、我身もなやめりとなり。あかねば、足らねばといふと同し。とくとおもふ、速に都にのぼらんとおもふなり。ねたき、殘念といふが如し。淡路の御の歌に劣れゝば、ねたきことなり。いはずしてありたらば、よかりけんものを、殘念なりと、悔しかる中に、奥に入りて、寢にけりとなり。

八日、なほ、川のほとりになつみて、とりかひの御牧（マキ）といふほとりに、とゞまる。こよひ、舟君、例の病、おこりて、いたくなやむ。ある人、いさゝかなるものもてきたり。米（ヨネ）して、かへりことす。をとこども、ひそかにいふなり。いひぼしてもつるとや、かうやうのことと、ところ〳〵にありけふせちみすれば、魚用ゐず。

とりかひ、摂津國島下郡なり。いさゝかなるもの、魚類なるべし。米して、かへりことす、當時いまだ稻米を通貨とせし風、遺り居りしならん。かへり

ことは、返禮なり。いひほ、飯粒なり。飯粒にて、鯛をつるといふことなり。せちみ　八、節忌なり。前に出てたり。

九日、心もとなきに、あけぬから、舟をひきつゝのほれども、川の水なければ、ゐさりにのみぞゐさる。このあいだに、和田のとまりの、あかれのところといふ所あり。米魚などこへば、おくりつ。かくて、舟ひきのぼるに、渚の院といふところを見つつゆく。その院、むかしを、おもひやりて見れば、おもしろかりけるところなり。志ありへなる岡には、松の木どもあり。なかの庭には、梅の花さけり。こゝに、人々のいはく。これむかし名高くきこえたるところなり。故惟高のみこの、御とともに、故在原業平の、中將の、世の中にたえて櫻のさかざらば春の心はのどけからましといふ歌よめるところなりけり。いま、興ある人、ところに似たる歌よめり。

千代へたる松にはあれどいにしへの
こゑのさむさはかはらざりけり

またある人のよめる。

君こひて世をふるやとの梅の花
むかしの香にぞなほにほひける

といひつゝぞ、都のちかつくをよろこひつゝのぼる。

心もとなきに云々、舟のいつまでも、たゞにあらんか、待遠きまゝに、まだ夜の明けぬ中より、引上るとなり。ゐさり、膝行なり。一向に進まぬこと。あかれのところ、人々の散け別るゝ街なり。こゝには、米魚などを賣りしものと見ゆ。攝津の西成郡なりといふ。渚の院、河内國交野郡なり。惟高親王、文德天皇第一の皇子、母從四位上紀靜子、正四位下名虎の女、天安二年正月廿三日に、太宰權帥に任し、同十一月帥に進み、貞觀十四年に、出家、十五年二月廿日に薨し給ふ。即ち、小野宮なり。業平の、慕ひまつりし君なり。世の中に云々、世間に櫻がさかざらば、春の心はゆるりとあらんとなり。これ花が咲けば、風雨の心配やら、彼是にて、心いそがはしければ、イッソ花がなければよからんと、深く櫻を愛す

るあまりによみし有名なる歌なり。興ある人、興がる人にて、紀氏みづから
のことなり。聲のさむさは、むかしながらの、音のすさまじきをいふなり。
君こひて、君とは、惟高のみこをいふ、一は松によせ一は梅によす、二首ともに、
意は同じ。

かくのぼる人々の中に、京よりくだりし時に、皆人子ともなか
りき。至れりし國にてぞ、子うめるものともありあへる。皆人、舟
のとまる所に、子をいたきつゝ、おりのぼりす。これを見て、むか
しの子の母、かなしきに堪へずして、

なかりしもありつゝかへる人の子を
ありしもなくてくるがかなしさ

といひてぞなきける。父も、これをきゝて、いかゞあらん。かうや
うのこと、歌このむとて、あるにしもあらざるべし。もろこしも、
こゝも、思ふことに、たへぬ時のわざとか、こよひ、宇土野といふ
所にとまる。

皆人、舟中の人々なり。いたれりし國、土佐國なり。ありあへる、有り合
るにて、土佐にて、子産し人が多くあり合ふとなり。かうやうのこと云々、か
やうなることは、歌好むとてのわざにはあらざるべし。情に迫りてよみしなり
となり。そは支那にても、この國にても、同しく詩歌は、感情によりて成るものぞ
といへるなり。宇土野、攝津島上郡なりといふ。

十日、さはることありて、のぼらず。
故障ありて、舟をいださゞりしなり。

十一日、雨いさゝかふりてやみぬ。かくて、さしのぼるに、東のか
たに、山のよこをれるを見て、人に問へば、八幡の宮といふ。これ
をきゝて、よろこびて、人々拜みたてまつる。山崎の橋見ゆ。うれ
しきこと限りなし。

よこをれる、横に折れたるをいふ。八幡山の見えたるは、いかにうれしき限り
なりけん。まして、山崎の橋なども、見えたるをや。

こゝに、相應寺のほとりに、ふねばし、舟をとめて、とかく定ること

あり。この寺の、岸のほとりに、柳多くあり。ある人、この柳の、川の
そこに、うつれるを見て、よめる歌、

さゝれ波よするあやをば青柳の
かげの糸して織るかとぞ見る

相應寺、山城國乙訓郡。定ること、相談することなり。さゝれ波、小き波なり。あや は、波の文を、綾に見なしてよめるなり。かけ は、水にうつれる蔭なり。糸して は、糸でといふにおなじ。

十二日、山崎にとまれり。

十三日、なほ山崎に。

山崎に在りといふことを省きてかけり。

十四日、雨ふる。車、京へとりにやる。

先に、とかく定められしは、かゝる事ともなりけん。

十五日、けふ、車率て來れり。舟のむつかしさに、舟より、人の家に
うつる。この人の家、よろこべるやうにて、あるじまたり。この主

人の、また饗のよきを見るに、うたておもほゆ。いろ〳〵に、かへ
りことす。家の人の、いでいり、にくげならず。ゐやゝかなり。

むつかしき、煩はしきこと、長き間の船中さもこそとおもひやられぬ。ある じ、主人の禮をつくすことにて、饗應することをいふ。うたておもほゆ、この人、禮をつくして、饗せるか、あやしく、よのつねならず、おもはるゝとなり。かさねゝよくすることをいふ。いていり云々、出入見にくからず、禮節あり となり。ゐや は、禮なり。やか は、細やか、濃やか、花やかなどのやかとおなじく、形容せることばなり。

十六日、けふの夕つかた、京へのぼるついでに、見れば、山崎の、棚
なる、小櫃の繪も、まがりのほらのかたも、かはらざりけり。賣る
人の心をぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて、
人あるじまたり。必しも、あるまじきわざなり。立ちて行きし時
よりは、來る時ぞ、人はとかくありける。これにもそれにも、かへ
りことす。

小櫃、張筥の類なり。まかりのほらのかた、糧餅（マカリ）の法螺貝の形せるものにて、このころの菓子の一種なり。是らは、いつれも棚にならべて、賣りしものなり。いまこゝにしも、いひ出せるは、女兒の、かぬて嗜みたりしものなりければ、一層心にとまりしならん。とかく云々、とやかくにもてなすとなり。先に立ちて行し時よりは、今かへり來りし時ぞ、人はよくもてなすとなり。これにもそれにも云々、一々返禮をきたりとなり。

夜になして、京には入らんとおもへば、いそきしもせぬほどに、月出てぬ。桂川、月のあかきにぞわたる。人々のいはく、この川、飛鳥川にもあらねば、淵瀬更にかはらざりけり。といひて、ある人のよめる歌、

久かたの月におひたる桂川
そこなるかげもかはらざりけり

またある人のいへる。

あまくものはるかなりつる桂川
袖をひてぐもわたりぬるかな

またある人のよめる。

桂川わか心にもかよわねと
おなしふかさに流るへらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜ふけてくれば、ところ〳〵も見えず。京に入りたちてうれし。

夜になして、夜に爲して都へ入らんとおもふは、旅裝などの、いと見ぐるしくなれりし故にもあるべし。いそきしも、しは例のなり。桂川云々、月に桂の緣あれば、かくいへる、おもしろきなり。飛鳥川云々、古今雜下「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵はけふの瀬となる」といふ歌あり。今この桂川は、その飛鳥川にあらねば、淵瀬も昔のまゝにて、替ることなしとなり。月におひたる、月に負ひたるなり。久方は月の枕詞、水もかはらねは、月のかげもかはらぬとなり。天雲の云々、天雲のやうに、遙に遠くおもひ居りし桂川も、今は袖を漬してわたることになりたることとよとよろこべるなり。心にかよはぬと云

々、水は心にかよふ譯にもあらねど、都に入りたちける心のうれしさと、同し深さに、流るゝやうなり、となり。よめる、いへる、皆おなじ。

家にいたりて、門に入るに、月あかければ、いとよく、ありさま見ゆ。聞しよりもまして、いふかひなくぞ、こぼれやぶれたる。家をあつけたりつる人の心も、あれたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて、あつかれるなり。されは、たよりことに、物もたえず得させたる。こよひ、かゝることゝ、聲高に、ものいはせず。いとはつらく見ゆれど、心さしはせんとす。

家をあつけ云々、家のみならず、そを預けておきつる人の心も荒れたるなりとなり。かくいひてそのことを下にかきつけたり。中垣こそ云々、初、この預け人は、隣家のものにて、アナタの家とは中垣の隔あるばかりにて、一家のやうなれば、御預り申さんとて、望みたるによりてあつけたるなり。されば、土佐にありし頃も、便あることに、物も絶えず慰勞として贈りて、得させたりけるに、今夜のこのさまはと、皆々聲高に、いはんとするを、制して、物もいはせずとなり。いとはのは、意味なし。一本になきもあり。心さし、これまで、預けつれば、たとひ、荒れたりとも、返禮はせんとするなり。

さて、池めいて、くぼまり、水つける所あり。ほとりに、松もありき。五年六年のうちに、千年や過ぎにけん。片枝はなくなりにけり。いま、生ひたるぞ、まじれる。大かた、皆あれにたれば、あはれとぞ、人々いふ。思ひ出てぬ事なく、おもひこひしきがうちに、この家にて、生れし女子の、諸共に、かへらねば、いかゝはかなしき。舟人も、皆子いだきてのしる。かゝるうちに、なほ、かなしみにたえずして、ひそかに、心しれる人と、いへりけるうた。

うまれしもかへらぬものをわかやとに
小松のあるを見るかかなしさ

とぞいへる。なほあかずやありけん、またなん。

見し人を松の千とせに見ましかば
とほくかなしき別れせましや

わすれかたく、くちをしきこと、多かれど、えつくさず。とまれ、かくまれ、とく、やりてん。

さて池めいて云々、この以下數句、庭園の荒れたるさまをいへり。思ひ出ぬ云々、かく荒れはてたるにつきては、いろ〳〵とむかしの事とも、思ひ出す中にも、女兒の事ぞ、とりわきて悲しくおもはるゝとなり。心ある人、紀氏夫婦なるべし。見し人を云々、見し人とは、過き去りたる人、即ち、亡兒の事なり。松の千年に云々、松の千年の齢に見なしたらばとなり。とほく云々、遠く悲しく別るゝやうなることはなからんを、と松を見て、懷舊の情の切なるをよめりしなり。わすれかたく云々、亡兒の事を初め、久しぶりに、かへり來て、家の荒れたりし狀などを見て、いろ〳〵おもひ出しなどして、忘れかたきことを多かれと、こゝにつくしえずとなり。とまれかくまれ、兎にもあれ、角にもあれなり。とくやりてん、速にこのかきたる物を、破り棄てんとなり。悲しくたえかたき事ども、筆にまかせて、かきつけたれは、見るもなか〳〵にいかゝはし、速に破りすてゝんとことわれるなり。

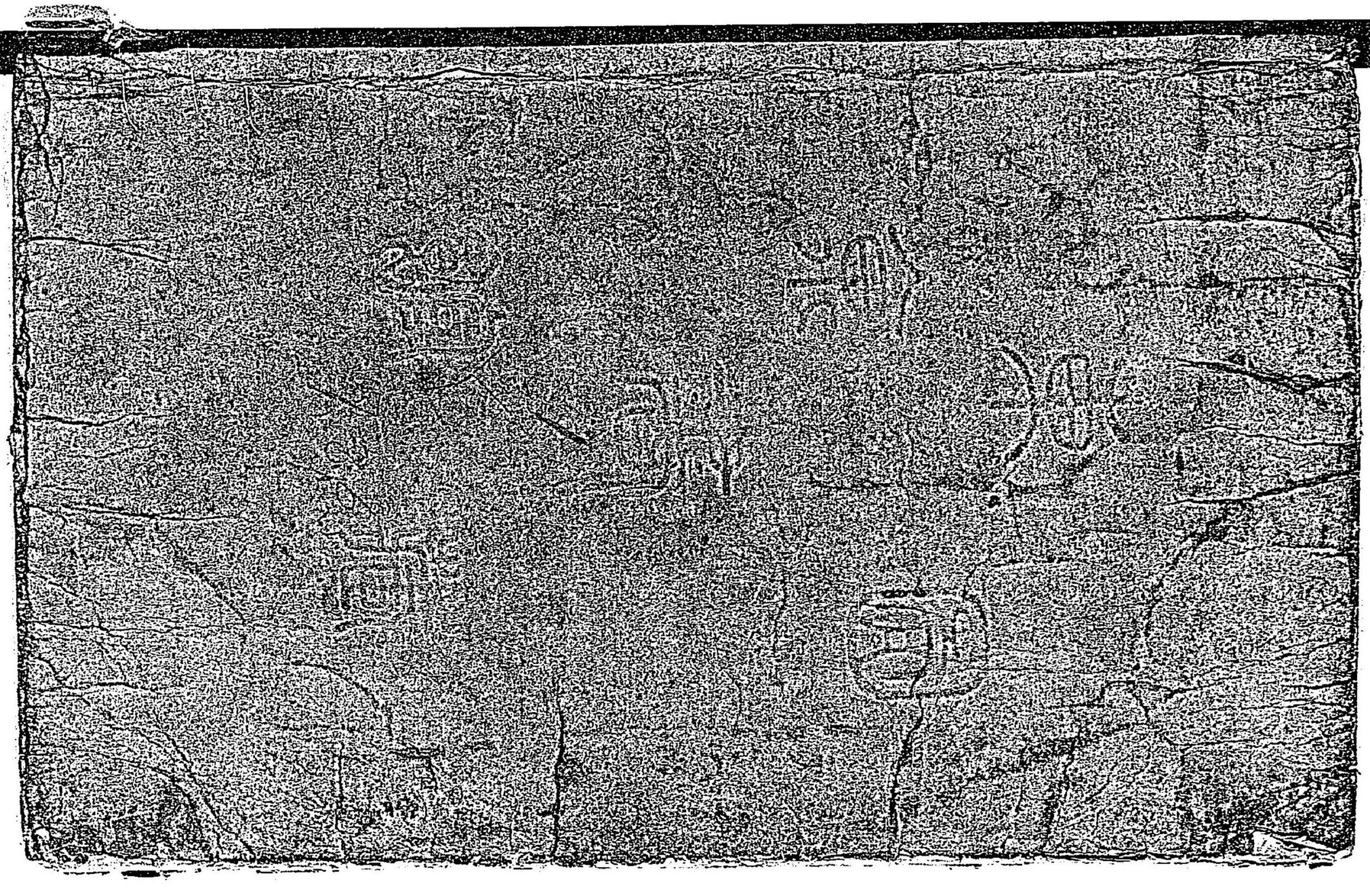
土佐日記講義完結せり。余はこれにて、國文の講義を終るべし。讀者諸君。紀朝臣が、外國風の文のみ跋扈せる當時に於て、我が國文を振作せむことを務められたる深意の在るところを悟りて、益、この文の爲に研究せられむことを望む。國文は實に國家の獨立を表明する最大機關なり。その文躰用語等につきては、他日を待ていふこともあらむ。

小中村　義象

62
P3

海陸物産貿易表

56



204663－000－6

62－83

国文講義

小中村　義象／述

M26

EDT－0037

小中村義象先生肖像